
刃の雫 ~tear of shadow~

玖琉 時斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

刃の雲／tear of shadow

【Zコード】

N4289D

【作者名】

玖琉 時斗

【あらすじ】

時は戦乱の世。遊びをするが如く頻繁に起ころる戦に、毎度嫌々赴く隠密武将・小野影慶。上に逆らう事は許されず、自分の感情を押し殺して人を斬ってきた。だが、今回の戦はいつもと勝手が違っていた。

丸くなりかけた月が輝く夜。

不気味で不自然なほど静寂な時間が過ぎる。

秋も半ばでいつもは五月蠅い虫声も、一匹も聞こえない。

ただ風で擦れる葉音だけが耳に届き、流れていった。

何か悪しき 자체が起こる前兆だとでも言うようで薄気味悪い。

灯籠の燈す明かりだけが室内を暖かくし、暗闇に沈みかける気持ちを慰めているように思えた。

「はあ……」

袴の上で胡坐を搔きながら、オノノカゲヨシ小野影慶は既に何度目かわからない溜め息を吐いた。

自分でも無意識に。

ふと何かを考える素振りを見せる度に、まるで癖のようについて出る。

「影慶様。如何なされました？」

闇の向こうに氣配が現れる。

彼は長くこの影慶に仕える忍の鬼塚オニツカリンコウ凜晃。

忍びであるが故に姿を見せてはいけないが、声から心配の色が伺えた。それだけ長い付き合いで、仕事間近以外では親しく話す仲だからこそ解る。

影慶は、心配せまいと微笑んだ。

「何でもない。それよりお前もそろそろ休め。明日は出陣の日だ」

訝るような視線が向けられているのが、伝わってくる。

それでも笑みを絶やさずにはいるが、やがて諦めたのか小さな溜め息が聞こえた。

だが、まだ不本意そうな聲音で返りてくれる。

「……影慶様も早くお休みになられませ。貴方様はこの度の政に必要な方。重要な役割を担つておられるのですから」

「ああ……、わかっている」

それを聞き届けると、凛晃の氣配がすうっと遠のいて行った。そのことを感じ取ると、影慶は再度溜め息をついた。

『この度の政に必要な』

「…………わかっている」

『重要な役割を担つておられるのですから』

「わかっている。だが…………！」

影慶は掠れる声を絞り出した。

明日は久方ぶりの戦だ。

しかし、影慶は全く気が進まなかつた。

それは元来から戦を嫌つてゐるからに他ならない。否、好きな者など阿呆な貴族ぐらいのものだろう。實際、今仕えている主は戦好きだ。

自分では鬪わず、下級の武士達に血を流させ、殺される。いわば遊びの一つなのだ。

自分より下の者を道具としか思つていない。

影慶はそんな中、隠密機動の班に配属されており、班長の役目を負つてゐる。

隠密と言つても凜晃のような忍といふわけではない。

忍んで行動するといふ点では同じだが、主な仕事は闇討ち。

相手が下級なら、眠りについている時に活動する。

だが攻める方の戦では、相手の裏を搔き、本陣に敵の目が向いている隙に近づき、敵大将を死なない程度に傷付け捕らえる役割となる。死なない程度にするのは、主が殺らねば見せしめにならないからだ。影慶がこの班につくようになったのは、その行動の速さと、急所を一瞬で切り裂く正確さからだった。

気の進まない話ではあつたが、主の命に逆らう事は許されない。だからいつも自我を押し殺し、無心となつて人を殺めてきた。しかし、今回の出陣は普段に増して、気が重かつた。

敵大将が問題なのではない。

ただ、向こうには決して交えたくない相手がいる可能性があるからだ。

その者の顔を思い浮かべ、影慶は三度息をついた。

仕方なしに褥に潜り込む。

ふと隣に置かれた刀に目をやると、繋がれた紐で手繩り寄せ、腕に搔き抱いた。

そして、瞼を重く閉ざした。

あいつに出くわさないようにな。

闘うことのないようにな。

そう祈りながら、意識を沈めた。

翌日。日が傾いてきた頃。

影慶の属する藩は、敵の中間地点に差し掛かった。

相手方も調査済みで、其処ではち合つ。

主の指揮と共に殺し合いは始まった。

幾人も人が斬り、そして斬られていく。

奮起も徐々に上がり始めた。

そんな時、受け方の敵大将は手薄となる。

影慶の率いる班は、戦いを横目に本拠地に向かつて駆けていた。手薄と言つても、全く敵がないわけではない。

少数での戦いのうち、残るは影慶・凜晃ともう一人だけとなつていた。

がさりと草を搔き分け、踏み締める音が近づく。

影慶たちは背を向かい合わせて、辺りに警戒を向けた。

がさつと一際大きな音がして、6、7人が舞い来る。

その姿を見咎め、動こうとする一人を影慶は手で制した。

手を出すなどいう意思表示だ。

影慶は目を細め、下限で構えると、一気に踏み込んだ。

キンという音が響き、刀が地面に突き刺さつた。

敵がばたばたと倒れていく。

まさに一瞬のことだつた。

凍て付いた瞳で亡骸を見やると、刀についた血を振り払つた。

「つー影慶さつ…ま……」

ふいに痛切な声が響いた。

それは共の一人の声だ。

どさりと落ちる音がして、影慶と凜晃は振り返つた。

血溜まりができ、彼の息はづ既に事切れているようだつた。

「…かげよし?」

その彼の隣で、男が訝しげに同胞が呼んだ名を反復する。

小さいが張りの利いた、低く響く男の声。

その声には二人とも聞き覚えがあつた。

一年と半年前以来、聞くことが叶わなくなつた声。

「み、つ…ひで？」

すっかり暗くなり、月明かりで顔が覗く。

口元には薄い笑みが浮かんでいる。

彼は旧友であり、親友の安岐杜光秀アキモリノミツヒであつた。

名は光と影という相反したものであつたが、出合った時からそりが合つた。

だのに、急に西へ行くという文を残して姿を消したのだ。

「やつぱり影慶か。ということは、そつちは凜晃か？」

くすりと笑つて光秀は言った。

影慶はもはや姿を隠す意味がなくなつたので、闇色の長布を取つた。高くで一つに縛つた黒髪が動作に合わせて揺れる。

その姿をはつきりと見止めた後、光秀は辺りを見渡した。

「相変わらず綺麗な斬り方だな。顔は少々老けたみたいだけど」

光秀はくすくすと可笑しそうに笑つた。

対し影慶は、厳しい瞳で見やる。

「……何故、お前が此處にいる？ビリして一年半前、俺達の前から姿を消した？」

その問いに、光秀はすうっと手を細めて、口先だけに笑みを乗せる。

「さあて…ね」

言葉を言い終えたと同時に、光秀の姿がふと消えた。否、消えたように見えただけだ。

次の瞬間には、凛晃の眼前に迫っていた。

「覚えてるよなあ、影慶？俺の足速は唯一お前に勝つていると…」

凛晃は突然の事態に判断が鈍り、動けずにいた。

光秀は下弦から刀を振り上げた。

鮮血が辺りに飛び散る。

凛晃が後方に倒れこんだ。

次いで、光秀が地面に膝をついた。

刀から手を離し、そのまま口元へ運ぶ。

途端、口から赤い霧を吐き出した。

彼の胸に、一本の刀が貫き通され、多くの血が溢れ出ている。

「な……なぜ？」

「……これも覚えてないか？お前の方が条件反射が速い…」

突き立つた刀は、影慶のものだった。

凛晃は上体を起こし、自身の身体を確かめる。

だが、何処も斬られていなかつた。

それは自分が斬られる前に、影慶が光秀を斬つたからに他ならない。刀がざるりと抜かれると、光秀は傾いでその場に倒れた。

「何故…刀を引いた？応える…光秀！」

「……こうでもしねえと、影慶は…俺を斬れないだろう？」

困ったような、悲しそうな曖昧な顔で、浅い呼吸を繰り返しながら、彼は笑つた。

影慶は悲痛な面持ちで、地に力なく座り込んだ。

「どうして、こんなことを…」

「俺は……な。もう戦をしたくなかったんだ。……あそこを出れば、戦は今より少なくなると思った。でも……つ……」

口から新たに血が吹き出る。

影慶は、もう声が出なかつた。

「でも……、其処でも変わらなかつた。戦好きの貴族ばかりで……。俺つて、馬鹿だよな……」

静かに語られていくのを、二人は黙つて聞いていた。
光秀は震える手を伸ばし、影慶の袂を掴んだ。

「影慶……。お前がこの時代を変えてくれ……」

その言葉に影慶は、目を見開いた。

光秀の手は次第に冷たくなつていく。

「俺の……最後の頼みだ……。……お前になら……できる。だから……頼んだ……ぞ」

「勝手なことを一つおい、光秀！？」

声が小さくなつていいく友の名を影慶は必死に呼び掛ける。
だがそれすらも聞こえていないように、光秀はふわりと幸せそうに笑つた。

「それから……ありが……とう。……すまなかつ……た……」

血が広がるのを止めた。

それきり光秀は動かなくなつた。

暫らく影慶は俯いて、光秀を見続けていた。

不思議なことに涙は出てこなかつた。

衝撃の方が強過ぎたのかもしれない。

影慶は自分と光秀の刀を手に取り、静かに立ち上がつた。

「影慶…様？」

訝しんで凛晃は小さく呼びかける。

その声に反応して、影慶が顧みた。

「凛晃…。俺は今から全てを裏切る。……共に来るか、否か？」

刃が首元に突きつけられる。

影慶の顔からは表情というものが抜け落ち、人を斬る時のものとなつていた。

「勿論、決まつております…？」

凛晃は頭を下げる代わりに、頭を伏せ、礼をとつた。

「共に参ります。自分の命が、尽きるまで……」

その返答に刃が引かれる。

このようなことをされずとも、凛晃の応えは決まつていた。

自分を友と呼び、命を救つてくれた恩人に死ぬまで尽くそうと

元々捨て子だつた凛晃を拾つてくれたのが影慶だつた。

死を待つてゐるだけだつた己に、生きても良いのだと光をくれた人。

そんな影慶以外の者の下で生きるなど毛頭なかつた。

影慶は一度視線を落とし、安らかに眠る光秀を見やつた。

「お前の望みを叶えよう。…行くぞ」

「御意…」

月明かりだけが照らす、薄暗がりの中。

二人は胸に刻んだ目的を果す為、駆けていった。

その後、影慶達は当初の敵をその手で討つた。

それは本来の任務に叛く行為。

そして、もう一人の旗頭の元にも一刀使いが現れた。

滅ぼされるのにそう時間はかからなかつた。

その現場を見て生き残つた者は、その光景を地獄絵図のようだと言つた。

鬼人と化した男と、その従者。

二人は元主の軍勢を滅ぼした後も様々な戦地に突如現れては全滅させた。

そして数多の戦が止む頃、ふつと姿を消したという。

以来、毎年この事件があつた日には、唸るような風と激しい雨が降る。

これは影慶と凜晃があの時に涙を流さなかつた分、友の死と時代に悲しんで泣いているのだと長く語り継がれた。

たとえ嫌でも、その時はやつてくる。

望んでいないのに。

願つていないので。

それでも動き続ける。

運命の歯車は、誰にも止められないのだから

。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4289d/>

刃の零～tear of shadow～

2010年10月11日03時25分発行